

2022年7月31日 主日礼拝

説教題「共に軛（くびき）を負う方」ヨハネ福音書5章1～9節

主任牧師 加藤 誠

「イエスは言われた。『起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。』すると、その人はすぐに良くなって、床を担いで歩きだした」(ヨハネ福音書5章9節)

映画『プリズン・サークル』は、島根の刑務所で実践されている教育プログラムを受けた受刑者たちの姿を描いたドキュメンタリーです。全体では25名くらいの受刑者たちが輪（サークル）をつくって座り、相談員から「子ども時代に辛かったことは何ですか?」「一番影響を受けた人は誰ですか?」などの問いを受けて自分で言葉にしてみたり、時には2～3名の小グループに分かれて課題を一緒に考えあうことを通して、それぞれが「過去」（自分の人生と自分が犯した罪）を見つめ、少しずつ「今とこれから」を生きる力を新たに獲得していく姿が描かれています。

受刑者たちが犯した罪はさまざまですが、共通しているのは成育歴における親からの激しい虐待や、周囲からのいじめの体験です。「親との記憶はない」「母親の顔を思い出せない」とか、「布団叩きやガムテープを見たくない、自分の周りに置きたくない」などと語られる言葉に、独りで背負うにはあまりにも過酷な重荷を子どもの時から強いられてきた受刑者たちの歩みが想像されました。

ある受刑者がこんなふうに語っているのが印象に残りました。「刑務所の中では名前を奪われ、番号で呼ばれる。そして、お前なんか生きていく価値がないかのような言葉を浴びせられていると、なんで自分だけがこんな辛い目にあうのかという怒りが強くなっていく。そして被害者に対しても『お前がこんなふうにいるから悪いんだ!』と、筋違いな怒りをぶつけてきた。けれども、この教育訓練プログラムで、自分の話を真剣に聴いてくれる人、自分の背中をそっと押してくれる人の存在を感じられるようになって、少し冷静に自分を見つめられるようになったし、少し被害者の思いを想像できるようになったと思う」と。

人は、自分では受け止めきれない過酷なつらい体験をすると、「どうして自分だけがこんな辛い目にあわないとならないのか?」という怒りを持ち、その怒りを周りの弱い人にぶつけることを正当化していく。そこに来て「お前など生きていく価値がない」などと断罪されると、さらに怒りが湧いてきて、被害者の気持ちをおもんばかることなどできるわけがない。怒りに怒りが増し加わっていくのです。けれど、これまで誰にも言えずに抱えてきた思いを聴いてくれる人がいて、自分が何に怒り、悲しく寂しい思いをしてきたのかを言葉にして吐き出すことで、少しずつ自分の心を支配する得体のしれない怒りの正体を考えるようになり、被害者の思いを想像できるようになっていく。そこには、受刑者たちがそれまで奪われていた人間性を新たに獲得していく一つの道筋／可能性が示されているような気がしました。

この映画を観ながら最初に浮かんだのが「人は独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者をつくろう」という創世記の神さまの言葉です。ここで「彼に合う助ける者」とは「向かい合って一緒に重荷を担う相手」という意味です。人は、自分一人だけの力で重荷を背負うことはできません。誰か一緒に向かい合って自分の体験を言葉にし、分かち合う存在を必要としているのです。この「独りでは生きられない弱さ」は決してマイナスなことではなく、むしろ私たちは互いに誰かの重荷と一緒に担ったり、重荷にそっと手を添えていく時に、神さまが与えてくださった「人間性の賜物」を一番よく発揮できる。そのように神さまは私たちを「弱さの中に結び合う存在」として造ってくださったのだと思うのです。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。…わたしの軛（くびき）を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる」（マタイ 11：28）。イエス・キリストは、私たち一人ひとりと向かい合って対話し、重荷を一緒に負ってくださる方として私たちの間に生きてくださいました。

ヨハネ福音書5章は、エルサレム神殿の近くにあるベトザタと呼ばれる池のほとりに38年間ずっと横たわり生きてきた人を主イエスが癒される話です。このお話は癒しとしてはちょっと不思議な話です。他の多くの癒しでは、病人あるいは家族・友人が主イエスのもとに癒しを求めて来て癒されるのですが、このベトザタの池の人は、イエスが誰であるかを何も知りません。主イエスが「良くなりたいか」と尋ねた時も「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいません」と、ちょっとひねた諦めの言葉を語っています。ところが、その言葉に構わず、主イエスが「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい」と命じられると彼は癒されます。

これは「癒し」が、私たち人間の側の信仰に関わりなく、ただ神さまの恵みとして起こることを示しています。「主イエスに対する立派な信仰があるから癒される」のではなく、「ただ神の憐みによって癒しは起こされる」のです。では、癒されない場合はどうなのか。そこに神の恵みはないのでしょうか。その問いに対する神の答えがイエス・キリストです。十字架の主イエス・キリストは、私たちの重荷をどんな時にもどんな状況でも共に担う方として、たとえ病が癒されない時も、神の恵みが確かに共にあることを教えてくださり、神の恵みの中にその人を守るために来てくださいました。私たちがこの十字架の主イエスに重荷を委ねる時、私たちは自ら背負わなければならない重荷を担う力を与えられていきます。十字架の主と対話することを通して、自分の「怒り」や「不安」の正体を見つめられるようになり、自分の隣人が背負っている重荷を覚えていく力を与えられていきます。

「共に軛（くびき）を負う方」として来てくださった主イエスを大切に受けて、主イエスの慈しみと恵みと希望を分かち合い、お互いの重荷に手を添え合うことのできる教会とされていきたいと願います。